

2021年  
11月15日  
月曜日

# 中川 慎一 教授（ドイツ語教育・異文化間コミュニケーション） 「大阪生野オモニハツキヨ」

二〇二二年に開設四五周年を迎える大阪生野オモニハツキヨは、在日コリアン女性のための識字教室で、大阪聖和教会で始まり、長らく聖和公会館で行われた。

大阪聖和保育園と聖和公会館は、二〇〇八年に関西学院と合併した聖和大学に由来し、関西学院創設者であるアメリカ人宣教師ウォルター・ラッセル・ランバスの母メアリー・ランバスを記念して創設された「ランバス女学院保育専修部」（一九二一年）に遡る。

一九七〇年代設立の「生野地域問題懇談会」に大阪聖和教会の信徒であるハルモニ（おばあさん）が訴えた。地問懇は「生野識字学校」の開校を決定し、一九七七年七月開校した。オモニとは朝鮮語で「お母さん」、ハツキヨは「学校」の意味である。現在のオモニの大半は、戦後に渡ってきた朝鮮人で、長らく日本に暮らしてきたが、日本語を学ぶ機会に恵まれなかった。しかし、子育てや労働から解放されたいま、日本語を学びたいという欲求をもつ。

ハツキヨのある地域は、コリアタウン（朝鮮市場）に近い、大阪市生野区で、日本で最もコリアンが集中して暮らす。一九七〇年代には約四万人の朝鮮人が暮らす生野区では人口の約二五％を朝鮮人が占めたという。

私があるオモニと学んでいた時のこと。私「買い物にはどこに行かばりますか」

オモニ「いつも行ってるスーパーよ、いつもの店にいかんと買われへんのよ、いつものスーパーやったら濃い口しようゆがどこにあるかわかってるしな」

濃い口しようゆと薄口しようゆのラベルを読めるということが、当たり前のことではなかった。私「お医者さんにはどうしていくんですか」

オモニ「自転車よ、バスにはよう

乗らんからな、どこで降りたらええかわからへんしな」

私「そうなんですか」と返事をした私は、気になってもう少し聴いてみた。

私「電車に乗って出かけることもあるんですか、JR桃谷駅からとか」

オモニ「息子と一緒に乗らへんよ、そやけど一人では乗られへんよ、どこで降りたらいいかわからへんしな、乗らへん、乗らへん、帰って来れんようになるしな、一人では乗らへん、この辺は暮らしやすいのよ、一番よ生野は」

オモニは、ハツキヨではいろいろなことを話してくださる。ある時そのオモニは、

オモニ「先生知ってるか、わたしがなんで今ここに居るか、知ってるか」と自分が日本に渡ってきた経緯を話し始めた。

戦後一九四八年にはじまる濟州島での事件、いわゆる「濟州島四・三事件」のために、家族の中に殺され

た人もあり、命からがら日本に逃げてきた人たちのおひとりだった。

聖和公会館で主事をつとめた金徳煥はオモニハツキヨの四〇年を振り返って「識字が、人の権利」としての解放を意味するならば、人生の終盤期まで耐え続けてきた思いを込めて『文字を学ぶ』こと、すなわち人としての権利をみずからの力で獲得しようとする彼女たちのエネルギーは、猪飼野の中心地から起こった地域運動の黎明そのものだったといえる」と語る。

人はことばを学び、そのことばによって力を得て、真に解放され自由になる。それが、当時の社会運動の中で始まった識字教室であり、その学びを通して本来市民が持っているはずの「市民権」に気づくのである。みなさん、一度オモニハツキヨに見学に来てみませんか。オモニと一緒に日本語を学んでみませんか。■